



企業は継続する

簿記から会計へ

前回は、会計の原点ともいえる複式簿記の仕組みについてご紹介しました。今回は、いよいよ本格的な「会計の世界」へ入っていきます。

ただし、複式簿記から会計へのステップには、ある特別な考え方を前提としていますので、まずはこの点について、中国式に麻雀に例えて考えてみることにしましょう。

1局清算？半荘清算？ それとも…1ヶ月後？

中国の麻雀では、点棒を使わずに1局清算をする地方も多いようです。このルールで麻雀をして、もし最初の局でたくさん負けてしまい、元手のお金を超えてしまったら、残念ですが、今日はもう麻雀を続けることはできません。

ところが日本では、半荘が終わるまで清算しないのが普通です。日本の方が気長なようです。ですから、最初の局で役満を振り込んでしまい、本当は元手を割り込んでいてもゲームを続けることができます。次の局で取り返せばいいからです。さらに、親しい麻雀仲間とやるなら、清算するのは

1ヶ月後、なんていうこともあるかもしれません。

こうして清算をどんどん先延ばしにしていくと、永遠に麻雀を続けることができません（借金がどんどん膨らんでいく可能性もあります）。

継続企業（ゴーイング・コンサーン）の前提

一局単清算せずにゲームを継続していく日本方式の麻雀と同様に、企業会計の世界においても、「企業は将来にわたって継続して存続する」という仮定をとっています。これを会計の言葉では、「継続企業（ゴーイング・コンサーン）の前提」といいます。

実際、複式簿記が発明された15世紀頃、大航海時代の商人は、投資資金を募って商売（航海）を1回行うことに収支を計算して利益を分配していました（＝中国式清算の例）。その後、商売の継続性・連続性とともに、1回の商売単位から、任意の単位で収支を計算する方法へ移っていきます（＝日本式清算の例）。これが、継続企業を前提として、年度ベースの会計期間により損益を算出する現在の損益計算書につながってきます。

近年の問題「倒産リスク」

また、継続企業の前提をすることにより、建物や機械などを貸借対照表上「固定資産」として計上するとともに、そのコストを「減価償却費」として期間按分するという発想も生まれました。ときは、18～19世紀、産業革命により大型機械設備や工場が世に登場した頃です。ちなみに、「会計士」という職業が誕生したのもこの頃といわれています。

さらに、近年では、売上急減や債務超過等の経営破たんの可能性（倒産リスク）のある企業についても、継続企業を前提とした決算で妥当なのかどうか、という逆の観点からも問題とされました。これが、企業の継続に疑義がある先については、その財務書類で開示させるという現在の新たな会計ルール導入の動きにつながりました。



斉藤 孝史

Nac-Mytsコンサルティングチーム
東京大学経済学部卒、東大大学院（会計学専攻）修了後、大手電機メーカー経理部を経て現職。国際会計基準、原価計算等に関する論文多数。

監修：中小田聖一（なかおだせいいち）
NACグループ代表、Minato CPA Ltd.共同創業者、
日本国公認会計士。